

シモーヌ・ヴェイユとフラナリー・オコナー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学文学部 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田辺, 保 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2005502

Title	シモーヌ・ヴェイユとフラナリー・オコナー
Author	田辺, 保
Citation	人文研究. 41 巻 6 号, p.347-353.
Issue Date	1989
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

〔研究ノート〕

シモーヌ・ヴェイユと フラナリー・オコナー

田 辺 保

二十世紀前半の一時期、一瞬の光芒を閃かせて消えて行ったシモーヌ・ヴェイユ (Simone Weil, 1909-43) が現代思想に占める位置、また現代の作家・思想家とかかわることで散らした火花の強さは、近時いよいよ再発見の驚きをもって注目されてきているといえる。既に生前の彼女とそれぞれに別な機会に、別な関心を通じて交渉することがあったボーヴォワールやヴァレリー、また二人のジョルジュ、すなわちバタイユ、ベルナノスなどとの相互影響、反発と共感の射程は、思想史、「詩」観、社会倫理、スペイン市民戦争の史的展望等々の見地からなお再び見究められる余地があり、第二次大戦後に彼女の書物に接した人々、出版者カミュに始まり、作家にして最初の académicienne マルグリット・ユルスナール、ルネ・ジラルド、エマニュエル・レヴィナス、ミシェル・セールにいたる現代フランス思想の担い手たちはいうに及ばず、英語圏のソントグ、マガリッジ、ドイツのドロテー・ゼレ、さらにはイタリアのシローネにいたる、まさしく「国際的な」感化の広がり理由も、——当然、私たち自身の身の回りの火急の諸課題に対する反省への触発力とする目的をもこめて、——検証し、確認し、納得し、その上でこの遺産の重要性を再評価しておかねばなるまい。いずれも今後の宿題として私たちの研究テーマのリストに上せ、他日の論証を期したいが、ここでは偶々最近入手した一冊のフランス語訳書簡集を手がかりに、意外な——しかし、ある意味では、必然的にそうあるべく予感され・期待された「出会い」の出来事を紹介し、その意味に若干のコメントをつけ加えておきたい。

* * *

その本というのは、アメリカの現代作家フラナリー・オコナー (Flannery O'Connor, 1925-64) の書簡集、『生きて在ることへの習熟』 (*L'Habitude d'être*, Lettres réunies et présentées par Sally Fitzgerald, traduit de l'anglais par Gabrielle Rolin, Gallimard, 1984) である。この原書は既に、1979年アメリカで出版されている (*The Habit of Being*, Farrar, Straus, Giroux, New York)。フラナリー・オコナーについては、日本では未だ一部の特殊な米文学研究者を除いて十分知られていず、長篇2篇 (『賢い血』 *Wise Blood*, 『烈しく攻むる者はこれを奪う』 *The Violent Bear It away*) 及びエッセイ集『秘義と習俗』 (*Mystery and Manners*) のほかは邦訳もない。オコナーの生涯を要約的に叙述してみても無意味な誤解を招くだけであるが、ジョージア州サヴェンナ (J・グリーン之母の故郷) に生まれ、アイオワ大学院で創作を学び、文筆生活に入ったこと、書簡集の編集者でもあるフィッツジェラルド夫妻のコネティカットの邸宅での寄宿をやめてジョージアに帰り、ミレッジヴィル郊外の農場で母と共に39歳の死の日までをすごしたことなどで、外側の事実ほとんど尽きるかと思う。そして、この「外側」を「内側」から特別のものとして染め上げ、「秘義」にいたる経験の厚みを帯びさせた因子として、その家系が代々カトリック教徒であったこと、50年頃から彼女自身も実の父を倒した難病 (紅斑性狼瘡) に襲われ、その数々の徴候に苦しみ、「死を前において」生きねばならなかったことの2つをあげておけば足りるであろう。もっともこの種の「レッテル貼り」こそは、特権を単なる特殊事例扱いにし、病的一症例としてファイルにおさめることで解決しがちな「極めつけ」に終ることの危険はつねに言っておかねばなるまい。サリー・フィッツジェラルドが、オコナーの書簡集に題した <the habit of being> の意味をもう一度かえりみておいてよいのかもしれない。それは、作家が夫妻の邸宅を離れたとき、あとに残した一冊の書物、——J・マリタンの『芸術とスコラ哲学』 (*Art et scolastique*) から取られたものであるという。もともとトミスト的な概念であって、マリタンは、才能よりも以上に芸術家にとって不可欠の精神的態度を <l'habitus de l'art> と名づけたのであった。本来、それは、存在のレヴェルを自己の行動によってたえず高めて行こうとする生命体にのみ可能なあり方なのであって、ある目標を目ざす主体の確かな内的配置だけがそのような二次的 *habitus* を獲得させうるのだとする。オコナーの稀れな生は、そのような意味での訓練の成果によってようやく到達・完成されたものであって、作家としての彼女の

持つ「理性的ヴィジョン」の透徹性、その標榜する「キリスト教的リアリズム」のおそろしいまでの深さは、この内的経験の静かな、苦しい熟成によって初めて可能であったといえる。ここで私たちは、ほとんど同一の精神的姿勢をもって34歳の生を成育させたシモーヌ・ヴェイユを思い返さざるをえない。彼女における「病い」もまた、運命の不当な加虐に面して絶望的反抗や自己への哀れみに陥ることなく、「感傷を排した、受容の目」を確実に育てて行く契機になったのである。友人G・ティボンにあてた手紙の中に、「あなたはまだ十分に＜暗い夜＞をくぐりぬけていない」との批判に向けた理由を考えあわせてみるべきである。ただ、根についた信仰を受けついだオコナーと違い、ユダヤ教徒の先祖を持つヴェイユにおいて、カトリシズムとの距離は、最後まで、——むしろ意識的に、遠く保持されていたと思われる。この世における聖性の実現という点では、私たちを途方にくれさせる極限形態をすら示しているにしても……。

* * *

オコナーの書簡集において、シモーヌ・ヴェイユの引用は9か所を数え、現代作家の中ではいちばん多い。そのすべてが、「＜A＞に」とただイニシアルだけで示された匿名の相手に対する手紙中にあらわれてくることに注目すべきであろう。編者はなぜか、この相手はその時点でなお名前をあかされるべきでないことを注記する。H・フィケット、D・ギルバートによるなら、(Fickett/Gilbert, *Flannery O'Connor, Image of Grace*, W. B. Eerdmans, 1989, pp. 95, 96), 「12歳を越えない少女」であって、この相手に対しては、通常公的には自己弁護に走りがちなオコナーが、非常に率直な内的告白をし、また真剣になって論争をいどみかけているのである。しかも、この少女と知り合うことができたことで自分が「四六時中味わっている＜おそろしい程の悦び＞(the terrific pleasure)」をすら打ち明けるにいたる。少女との文通は、1955年7月に始まり、9年間つづく。手紙の交わされ出した最初の頃、55年8月2日には未だ、シモーヌの書物に触れたことがないのを知らせながら、次のような感想を述べる。

あなたはシモーヌ・ヴェイユをお読みになったことがあるのではないかと考えています。私は読んでいません。読もうとしたところで理解できないのでは…とおそれています。しかし、私の知るかぎりでも、

彼女は、驚くべき人であったのに違いありません。エディット・シュタインとならんで、私のもっとも関心を引く二十世紀の女性です（…）

(*op. cit.*, p. 82)

つづく8月9日の手紙は、「あなたという方は一挙に、私に、シモーヌ・ヴェイユのことを思い起させました」という一文で開始される。どうやら、*《A》*から受けとった直前の手紙に、一通の論文が同封されており、その内容を読んだ判断であるらしい。それがどのようなものであったかは記されていないが、推測するより外はないが、「私がついにほとんど知らずにきた経験のひとつ」、すなわち「回心者の経験」に関する事柄であるらしい。「教会の魅力から逃れようとつとめるあなたの努力は、私をずいぶんと感動させます」という言葉もみえる。とすれば、相手はこのとき、信仰の危機に際会していて、その不安と苦悩をオコナーに打ち明けてきたのかもしれない。シモーヌ・ヴェイユに対する「理解しがたさ」をいう彼女の理由のひとつが、教会内に終始とどまってきた人の「回心者への嫌疑」にかかわるものであったと、ここで早速断定してしまってもよいだろうか。オコナーに関する限り、シモーヌ・ヴェイユの本質に対する直観的把握の内実は、もっと別種の次元のものであったとみられるのではなかろうか。

*《A》*あての手紙のあるものにおいて、オコナーはモーリヤックのサガン論を引いている。モーリヤックは、『悲しみよ…』が悪魔によって書かれたと評した。この評を読んだオコナーは、直ちにサガンの小説に目を通したという。「モーリヤックは何も言わずいた方がよかった。悪魔の方が、サガン嬢よりももっと上手に、立派に書いたはずだから」。この引用がある55年9月15日の手紙に、「シモーヌ・ヴェイユを初めて読んだ」感想が書かれるのである。日時はさらに先になるが（63年5月25日付）「私は、シモーヌ・ド・ボーヴォワールを決して読んだことはなく、また読もうとも思わない」と記された一節につづいて、「ただし、シモーヌ・ヴェイユは、おそろしい（monstreux）何ものかであると思う」とする指摘がでてくるのにも注意したい。「私の関心を強く引きつける種類のおそろしさ（monstruosité）」（*op. cit.*, p. 339）。すなわち、サガンやボーヴォワールの感性や思想の次元とは明確に隔絶したたぐいの、別種の秩序からくる「おそろしさ」を、オコナーは敏感に察知して、シモーヌ・ヴェイユからあえて遠去かっていたようではなかったのである。56年12月28日付の手紙には、こうある。

私がシモーヌ・ヴェイユの『カイエ』を所有したいとの願いをついぞ持たなかったなんて、だれが知っていきましょう。それは、彼女と同じ高みに位置することを求められるような読者になるはずです(…)汲めどつきないといったたぐいの書物が存在します。シモーヌ・ヴェイユは、私たちを謙遜へと呼びもどす秘義の体現者なのです。私にはことに、そうした秘義が必要です(…)

ほとんど明らかではないだろうか。オコナーにとって、『カイエ』の著者は、「秘義」に向かうときに感じると同種のおそろしさを覚えさせる対象ではなかったのだろうか。おそらくは「対象」ですらなかったのかもしれない。畏怖の源泉は、あるいは内部にひそんでいたのかもしれない。オコナーは、自分の手もとの「タイム」誌の古い号から、シモーヌの写真を切りとり、『カイエ』に貼り付けようと思うと、《A》に語る。「この顔が、ノートに一種のリアリティを与えることになりましょう」。その顔とは、実は彼女の内深くにあってたえず微笑みかけていた顔なのである。

55年9月初めに、《A》が敬愛する作家にシモーヌ・ヴェイユの作品の幾冊かを送ったことは間違いない。先にも引用した9月24日付の手紙は、『ある修道士への手紙』から始めて、2冊めの読書に〈アタック〉していることを報じている。「これらの書物は、あなたが必要となさるまで手もとにとどめておきます…」シモーヌの生がいよいよ、自分を引きつけるとの告白も出ている。「しかし、彼女の生には、喜劇的な要素と悲劇的な要素がほとんど同じ割合で釣り合っています。おそらく、それは同じメダル両面なのです(…)シモーヌ・ヴェイユの生は、めったにない喜劇的なものと真正の悲劇的なものによって同程度に、私を打ちます」(*op. cit.*, p. 97)。ここでオコナーが小説家としての自分自身の体験を通じ、「滑稽なものとして描いたすべては、喜劇的であるだけにおそろしく、喜劇的であるからこそおそろしい(または、その逆)」とつけ加えているのを見のがしてはなるまい。喜劇性の極致が地上において具現するなら、それは超自然のおそろしさに触れる。聖ドン・キホーテはつねに、十字架上のキリストの面貌をうかがわせるにいたるのである。真の「滑稽さ」を描くことの困難さをよく知悉していた作家オコナーならではこそその卓見だといえよう。だからこそ、さらに年輪を重ね、自分の才能を完全にコントロールできる時になれば、女性を主な登場人物とする、喜劇的な作品を書きたいとの希望を述べるのである。差し当りは、彼

女に描けたのはハルガだけであった（《Good Country People》に登場する女性。哲学博士の学位を持ち、知性に絶対の信頼を寄せ、信仰に対して冷笑的・否定的態度を示す）。「ハルガのことを、私は、悲劇的・喜劇的状况下における私自身の投影と見ています」（*op. cit.*, p. 98）。投影であると自覚しているなら、ハルガの姿に原像の影はやがて、否定しがたい形で重なって見えてくるはずである。

多分は、《A》からの返信に反論めいた口調がうかがわれたせいであろう。55年9月30日付の手紙では、「喜劇的で、おそろしい(*comique et terrible*)」という評語について再度の説明が加えられる。そのように言うことは、「決してシモーヌ・ヴェイユを小さくすることではないのです(...)これ以上の大きい讃辞はないのです(...)この2つの語について、おそらく私は、あなたよりずっと高い評価を与えています(...)シモーヌ・ヴェイユのことを、もっと穏やかな語をもって語るなら、一般普通の女たちの列に彼女を追いやってしまうことになります。彼女はまさしく、そうではなかった…」(*op. cit.*, p. 98)。

私たちはここで、オコナーにおいて、シモーヌがなぜ「おそろしい」存在と見たかを問うておくべきであろう。「シモーヌ・ヴェイユの生は、私の頭にあったものと相い並んで記しづけられました(…)」(*ibid.*)。「おそろしさ」は、ほぼ完全な実現例をまざまざとそこに見たことから来ているのかもしれない。オコナーのエッセイ集『秘義と習俗』におさめられた文章の中で一ばん感動的であり、また深く教示的であるのは、「ある少女の死」であろう。ナサニエル・ホーソーンの娘ローズが創設したドミニコ会女子修道会経営の癌療養所に、メアリー・アンの名を持つ3歳の少女が預けられ、そこで12年間を生きた。アンは、顔の片面に腫瘍を持って生まれ、どのような種類のおそろしさを見ることにも耐える勇氣あるシスターたちに育てられて、彼女たちの腕の中で死んだ。この少女の物語を書くことを修道院長にすすめられた時、オコナーは最初アンの写真を「ちらっと見ただけで、すぐ傍に押しやって」しまった。尼僧たちにそれを返す段になって、彼女はそれを「凝視」しつづけるのである。凝視したものは何であったか。

その顔がやはりグロテスクであるという事実を受容できるまで、長いこと善を凝視した人は、ほとんどいないのだ。そして、善なるものは、われわれの中でまだ未完成であると得心できるまで、善に目を凝

らした人もめったにいない(…)善の顔をつくづくのぞきこんでみるなら、そこにメアリー・アンのような顔、可能性を多く秘めた顔を見るはずである(『秘義と習俗』上杉明訳、春秋社、1982、p.214)。

アンの顔を見つめぬく目こそ「受容の目、すなわち信仰の目」であり、それが「人間の不完全さとグロテスクさ」を見るときオコナーは記している。すなわち、「死」を。そして、シモーヌ・ヴェイユこそは、「注意力」(attention)という比類のない用語で、この注視の能力を育て上げることだけが地上の人間のすべての営みの真の目的であると説かなかったであろうか。

苦痛や極度の疲労がこうじて、魂の中にこれは果てしなく続くのではないかとの感じが生じるまでになったとき、その果てしなさを素直に受容し、愛しつつ、それをじっと見つめつづけるならば、人は、この世からもぎ離されて、永遠にいたる(シモーヌ・ヴェイユ『重力と恩寵』田辺保訳、講談社文庫、1974、p.40)。

これが「学び」である。フラナリー・オコナーも、「メアリー・アンにとって重要なただ一つのこととは、死に向けての教育である」と書いた(前掲書、p. 212)。